

## 愛知者群像

北畠知量

### はじめに

ソクラテスは生涯を魂の教育に捧げた。けれどもこの教育は、結果的には、ごく少数の愛知者を育んだにすぎない。人々の反応は、ほぼ次のようなものであった。

・多くの人々は、自らの無知を思い知らされ、強い衝撃を受けた。だから人々はソクラテスに恨みを抱き、二度と彼に近づこうとはしなかった。その様子を見た若者達は、ソクラテスのやり方をまねて人々をやりこめたので、ソクラテスは更に多くの人々の反感を買うことになった。その結果ソクラテスは、作家たち（代表者はメレトス）や、手工者と政治家たち（代表者はアニュトス）や、弁論家たち（代表者はリュコン）から憎まれることになった（Apol.24）。愛知

するなどということは、人々にとっては、まったく必要のないことだったのである。これが普通の人々の反応であった。  
・富と名声と権力にしか目ががないという人間は、いつの世にも存在する。野心家のメノンはその代表者といえる。彼はソクラテスと徳について語り、思いもしない問題に直面して「しびれる」ような衝撃を味わった。けれども彼には、富と名声と権力を捨ててまで愛知することなど思いもよらぬことであった。彼は、どうしても愛知への一步が踏み出せなかった。

・青雲の志をもち、才知に長けたアルキビアデスは、実生活においても、哲学においても、戦場においても、ソクラテスから強烈な刺激を受けた。彼はソクラテスの仲間となって愛知者を目指そうとした。このように、ソクラテスに接した青年たちの中には、一定期間ではあるが、ソクラテスに心酔する人々もいた。けれどもほとんどの者は、彼から離れていった。ソクラテスは、知恵の出産と取り上げについてふれた後、「……多くの者どもが、このことを覚るにいたらないで、取り上げも自力でなしたものと信じ、僕を軽蔑して、自分の独り了見か、あるいは他人のそのかしによって、時期がなお早いの僕のところから離れた……」者の数は、非常に多いと述べている。Thaet.150.E

・ソフィスト達は、徳と愛知に関して、ソクラテスとはその立場をまったく異にしている。徳を教えることが出来ると主張するプロタゴラスは、ソクラテスと緻密な論戦を展開し、これに負けて強い衝撃を受けた。だが彼は、自分の生き方そのものには何の疑問も抱かず、ソクラテスと対等以上の立場を堅持している。ゴルギアスも弁論術の醜さについて相当に手厳しいことを指摘されるが、それによって自分が否定されたとは思っていない。彼らは、徳と愛知を商品として見ているのであった、自分の問題としてこれを扱ってはいないのである。ソフィストの多くが、このような生き方を

していたと考えてよいだろう。

・ソクラテスに痛い目に合わされながらも、立派なポリス人であるためには、吟味されることは重要であると考え、進んで彼と親交を結ぼうとする者もいた。ニキアスは、ソクラテスの仲間にはならなかったが、そのような人物の一人であった。

・愚直な軍人のクセノポンは、ソクラテスから様々な知識・教訓・処世術だけを学び取った。クセノポンは、ソクラテスからそのような事柄を学んだ者は、実に多いと報告している。

このように、魂の教育に接した人々の反応は、いずれもソクラテスの期待に反するものであった。

この教育が最もうるわしく開花したのは、もちろんプラトンを初めとするソクラテスの仲間達においてであった。では、ソクラテスの仲間とは一体どのような人々だったのであろうか。

法廷でソクラテスは、裁判傍聴者のなかで、自分と深い関わりがあった者達の名前をあげている。

「まずあそこには、クリトンがいる。…クリトブロス、リュサニアス、アイスキネス、アンティポン、ニコストラトス、パラロス、アディマントス、プラトン、アイアンドロス、アポドロロス…そしてそのほかにも、私は諸君に、たくさんの名をあげることができます (Apol.38E-34)」

またパイドンは、ソクラテスの臨終に立ち会った問答仲間と言及している。

「このアポドロロスのほかに、アテナイの土地のものとしては、クリトブロスとその父(クリトン)さらにはヘルモゲネスと、エピゲネスと、アイスキネスと、アンティステネスがいました。それからパイアニア区のクテシッ

ボスとメネクセノス、ほかにもアテナイの者がまだ何人かいました。」

よその都市の人たちとして

「テバイのシミアスも、ケベスもいましたし、またパイドンデスもいました。それにメガラからは、エウクレイデスとテルプシオンが来ていました。」 Phaedo. 59B-C

クセノボンもまた幾人かの名前を上げている。

「ソクラテスに親しんだ友（弟子）にはクリトンがあり、またカイレボン、カイレクラテス、ヘルモゲネス、シミアス、ケベス、パイドンデスその他があった。この人々は：有徳の士となり、家に対し家族に対し、親せき友人に対し、国家に対し市民に対して、立派に本文を尽さんがために彼についたのである。Mem. I. 2.48]

ここに名前のあがっている者以外の人物まで含めると、ソクラテスの仲間達は十代から七十代に及んでいる。以下、彼らが具体的にどのような人々であったのかをみてみることにしよう。

## 【一】愛知者群像

①アポロドロスⅡアテナイのパレオン区の住人 (Sym. 172A Phaedo. 59B)。ソクラテスに接してからは、それまでの自分の無意味で惨めな生き方を反省し、日々彼の言行を我が物にしようところがけ (Sym. 173)、ソクラテスのそばを離れなかった (Mem. III. 11.17)。「年中、自分やそのほかの連中を非難し」、自他共に「荒々しい態度」をとった (Sym.

173C)°。感じがやすい性格<sup>2</sup> (Phaedo.59) それが「心優しい人 (Sym.173C)」とこうあだ名のもとになった。ソクラテスの裁判の際には、他の仲間とともに三十ムナの科料の保証人となることを申し出ている (Apol.38B)°。処刑当日、彼はたえまなく涙にくれていたが、ソクラテスが毒杯をおおぐと「なげきといらだちのあまりに叫喚した (Phaedo.117D)。」  
②クリトブロス<sup>3</sup>アロベケ区に住むクリトンの息子で、やせていた (Euthyd.271B)°。美少年に弱く、すぐに恋をしてしまうような性格で、この点に関してソクラテスから忠告を受けている。『思ひ出』の中で、彼はソクラテスと友人について長々と語り合っており (Mem. II.6)、これが彼に関する最大の記述ということになる。しかしその中身はいたって単純で、互いに善き人物をめざして努力しようということに尽きている。クセノポンはこのような記述しか残していない。けれどもクリトブロスは、ソクラテスの科料保証人を申し出ており (Apol.38B)、ソクラテスの臨終にも立ち会っている (Phaedo.59B)°。これらからするとクリトブロスは、色恋いには弱かったが、善き人物たろうとして真剣に愛知に従事したものと察せられる。

③クリトン<sup>4</sup>ソクラテスの竹馬の友であり (Apol.38D)、彼と同じアロベケ区に住み、裕福な人であった。クリトブロスをはじめ、ヘルモゲネス、エピゲネス、クテシッポスという息子がいたが、いずれもソクラテスの弟子となった (D.L. II.12.121)°。彼はソクラテスの人格にほれ込み、彼の面倒をよくみたが、優れた個人的な思索家であったとは言いがたい。『クリトン』に登場する彼は、熱心にソクラテスに脱獄を勧めているが、その論調は健全な社会常識の域を出っていない (Crit.45C-46)°。彼はソクラテスの臨終に立ち会って、死ぬ直前の遺言 (アスクレピオスへ鶏一羽を奉納せよ) を聞き、息絶えたソクラテスの口と目を閉じた (Phaedo.118)°。十七編の対話編を書いたと伝えられている (D.L. II.

12.121)。

④ ヘルモゲネスⅡアテナイ随一の金満家で名家のヒッポニコスの二人目の息子 (Crat. 384A 406B)。兄はカリアス。本人はその弟子にあたるが (Crat. 391C) 嫡出子ではなかったのか財産の相続権はなく、経済的にも困っていたことが察せられる (Crat. 384C Mem. II. 10. 3)。ソクラテスによると、彼は、助けられればその恩に報わないではいけないような心情の持ち主であり、家政の実務面において有能であった (Mem II. 10. 3)。彼は、ソクラテス裁判から処刑にいたる状況を知ることができたらしい。そのため彼は、陪審員達がその時々気分によって左右されて判決を下してしまう裁判の実情を憂い、弁明の文句を事前に考えておくべきだとソクラテスに進言している (Mem. IV. 8. 4)。ソクラテスの仲間の中でもとりわけ「親しい仲間」の一人であり (Mem. I. 2. 48)、臨終にも立ち会っている。また彼は、自分はソフィストのように「言説を工夫することを長じていない (Crat. 408B)」と述べており、自説をとうとうと開陳するような才能の持ち主ではなかったようだ。

⑤ エピゲネスⅡ父親はアンティポーン。ソクラテスの弟子で、臨終にも立ち会っている (Phaedo. 59B)。年若いのに貧弱な体をしていた。その点をソクラテスにたしなめられた時、「運動は素人なんだ (愛知のほうを専門にしている) Mem. III. 12. 1」と答えている。

⑥ アイスキネスⅡソクラテスの弟子で臨終にも立ち会っている (Apol. 33E Phaedo. 59B)。

⑦ アンティステネスⅡソクラテスの弟子で臨終にも立ち会っている (Apol. 33E Phaedo. 59B)。生粋のアテナイ人ではなかった。ピレウスに住み、毎日四十スタディオーン (七・四キロメートル) の道を歩いてソクラテスのもとにかよい、

彼から「困苦に耐えること」や「情念に乱されない心」を学んだ。ソクラテスの禁欲的な一面を受け継いで、犬儒派（キュニコイ）の祖となった（D.L.6.2）。彼は常々「私は快楽に耽るくらいなら、気が狂っているほうがましだ（D.L.6.3）」と語っていたという。哲学から何を学んだかと問われて「自分自身と交際する能力だ（D.L.6.6）」と答えている点からすると、彼は禁欲的であると同時に内省的な性格の人物であったと思われる。ただし、プラトンはあまり仲がよくなかったようだ。

⑧ クテシッポス＝パイアニア区の住人で、ソクラテスの弟子。臨終にも立ち会った（Phaedo.59B）。ソクラテスは彼を「若いということによって傲慢だが、その点を除くと、その他の性質はまことに立派で見上げたものだ（Euthyph.273B）」と評している。

⑨ メネクセノス＝ソクラテスの臨終に立ち会っているが、そのとき二十歳くらいであった。クテシッポスのいとし。リュシスの親友。ソクラテスは彼に「君は、自分の教育と教養は完成したと考え：もっと大きな仕事にむかおうと思っているのだらう。そして君は、なんと感心なことに、その年かっこうで年長のわれわれを支配しようともくろんでいるのだ（Menex.234）」と話しかけている。このことからメネクセノスは、国事に参加し名を成そうとする名門子弟の一人であったことが察せられる。彼は『リュシス』に登場してソクラテスと対話しているが、その中身は、ソクラテスの問いに賛否を示し、彼に同意したり相づちを打つだけである。また『メネクセノス』でもソクラテスの演説を聞けばかりで、自説（持論）のようなものを主張してはいない。

⑩ パイドン＝ソクラテスの臨終に立ち会い、その場にいた人々の名前を報告している（Phaedo.59B）。『哲学者列伝』

によると「パイドンはエリスの人で、よい家柄の出であったが、祖国の陥落とともに囚われの身となり、いかがわしい家（娼家）に無理やり預けられた。しかし彼は扉を閉ざして、なんとかソクラテスの仲間に加わろうとしていたので、結局ソクラテスがアルキビアデスかクリトンのどちらかに頼んで、身代金を払ってもらって彼を自由の身にしてやった。そしてそれ以後彼は自由人にふさわしい仕方哲学の勉強をつづけた（D.I. II.105）」と記されている。『パイドン』に登場する彼は、ソクラテスと直接議論してはいないが、かつてソクラテスと感動的な対話をしたことがあると語り（88A-C）、ソクラテスの議論能力とその態度に感嘆している。パイドンが書き残した対話編の断片的内容から、彼は倫理的方面に関心が深かったことがうかがえる。ソクラテスの死後、彼は故郷のエリスに帰り、そこで学派をひらいている。

⑪シミアスⅡテバイの出身で、同郷のケベスとともに、ピロラオス（ピロラオスはクロトンの人でピタゴラスの徒 D.I. VII.84）の教えを受けた（Phaedo.61D）。『パイドン』ではケベスとともに、魂の生成・消滅についてソクラテスと議論し、「魂とは肉体を構成している諸要素の調和である」という主張をしている。この主張は、ピタゴラス派の考えを連想させる。彼はまた、ソクラテスを取りまく熱心な若者の一人であり、ソクラテスの脱獄のために充分の金銭を用意した（Crit.45B Mem. I.2.48 Mem. III.11.17）。またシミアスは、パイドロスと同じような言論能力の持ち主で、たくさんの話を作って聞かせたり、またそれらを人に話させたりすることに長じていた（Phaedo.242B）。『哲学者列伝』によると、シミアスは二十三篇の対話篇を残しているが、これらの対話篇の中心テーマが「善美の事柄」であることは、すぐに察しがつく。ケベスとともに、ソクラテスの臨終に立ち会っている。

⑫ケベスⅡテバイの出身でシミアスのパートナー。プラトンはケベスを評して、「我々みなにとって、身内同然で、し



かも親切的な男です Epist. 363」と記している。

⑬ パイドンデス＝詳細不祥。『思ひ出』にその名前だけがあげられている。Mem. I. 2.

⑭ エウクレイデス（メガラ出身）＝ソクラテスの古くからの友人で、臨終にも立ち会っている。『哲学者列伝』によると、彼はバルメニデスの学説をも研究した人であったとされている（D.L. II. 106）。そのために、彼は厳格な論理主義的傾向を有していた。この点でエウクレイデスは、ソクラテスに引かれたのかもしれない。彼の出身地メガラでは、一時、アテナイへ行く市民は死刑に処するとされていたが、彼はこれをかえりみず、危険と困難を冒してソクラテスのもとに通った（Aulus Gellius, Noctes Atticae VI 10）。ソクラテスの処刑後、プラトンとその仲間の哲学者たちは、独裁者たちの残酷さを恐れて、エウクレイデスのもとに逃げてきた（D.L. II. 106）。このことから、彼は仲間うちでも信頼のあつた人物であつたものと察せられる。また彼は、善は多くの名前（時には思慮、あるいは神、知性その他）で呼ばれるが、善は一つであるという考えを主張したとされている。つまり彼は、エレア学派の「有るものは一つである」という原理と、ソクラテスの倫理思想を厳格な論理で統合しようとしたのである。彼の後継者たちは、始めはメガラ学派と呼ばれ、ついでエリスティコイ（論争家たち）、後にディアレクティコイ（問答競技家たち）と呼ばれた（D.L. II. 106）。

⑮ テルプシオン＝メガラ出身でソクラテスの臨終にも立ち会う。詳細不祥。

⑯ アリスティッポス＝ソクラテスの仲間でキュレネ出身。ソクラテスの臨終の時、彼はアイギナにいた（Phaed. 59C）。キュレネ学派の創設者。彼に関する資料として、主に『思ひ出』（Mem. II. 1）と『哲学者列伝』（D.L. II. 5）があげら

れる。ソクラテスの名声を慕ってアテナイへ来、権力者や金持ちに寄食するソフィスト的生活をおくった。ソクラテスの仲間内では最初に謝礼を取り立てて、その金を師に送ったと伝えられている (D.L. II. 65-66)。彼は、善の究極とは快樂であるとし、これが生の目的であるとした (D.L. II. 85)。『哲学者列伝』によると、彼はぜい沢に暮らし、教養があり、弁が立ち、女を囲いながら哲学する人物として描かれている。そのような人物であったためか、プラトンとは肌が合わなかったらしく、プラトンは彼について何も言及していない。クセノポンも『思ひ出』に中で、「(ソクラテスは) 次のように語って、弟子たちに食事や酒や放蕩や眠りに対する克己、および寒さや暑さや艱難に対する忍耐の涵養を鼓吹したと私は思う」と述べ、そのような弟子の代表としてアリストイポスの名をあげて、かなり批判的な描き方をしている。

⑰クレオンプロトスⅡソクラテスの臨終に立ち会う。詳細不詳。

⑱クセノポンⅡ『哲学者列伝』によると——クセノポンは、ある狭い路地でソクラテスに出会い「人々はどこへ行ったら立派なすぐれた者になれるか」と問われた。クセノポンが、返答に困っていると、ソクラテスは「それなら僕についてきて勉強なさい」と言った。そのときから彼は、ソクラテスの弟子になった。——とされている (D.L. II. 48)。哲学者プラトンは、彼についてまったくふれていない。純朴な軍人のクセノポンも、ただ一か所 (Men. III. 6.1) を除いて、プラトンには全くふれていない。『哲学者列伝』には、両者が同じような書名の本を著していることから、両者は互いにしっしあう仲になったとか (D.L. II. 57)、クセノポンはプラトンに対して好意的ではなかったように思える (D.L. III. 34) などと記されている。両者が表した本の内容から考えるならば、両者は互いに理解しえないほど精神的に遠く

離れた存在であった。ソクラテスの処刑の際、彼は出征していてアテナイにいなかった。

①9 プラトンⅡ『哲学者列伝』によると、悲劇の競演に参加しようとしていたプラトンは、劇場のまえでソクラテスにであい、ソクラテスにいさめられて彼の弟子になったが、そのときプラトンは二十歳であったとされている(D.I.Ⅲ.56)。けれども、彼の身内の年長者達(兄のアディマントスとグラウコン、母方の叔父のカルミデス、母の従兄のクリチアスなど)は、長くソクラテスと交際しており、プラトンもまたソクラテスを知っていたと考えるのが自然である。おそらくプラトンは、二十歳の時に、それまで見知っていたソクラテスと師弟関係になったということなのであろう。これ以降、プラトンとソクラテスの師弟関係がどのようなものであったかは、第七書簡から断片的に推察できるにすぎない。プラトンが二十八歳のとき、ソクラテスが処刑された。そのとき彼は病気で、臨終の場にはいなかった(Phaedo.59B)。その後のプラトンの歩みに関しては、多くの研究がなされている。八十歳で没し(前三四七年)、アカデメイアの構内に葬られた。

②0 カイレポソⅡソクラテスに心酔する古くからの友人。デルポイへ出かけて行って、ソクラテス以上の知者はいるかどうかとアポロン神にたずねた。やせていて青白く、軽薄で熱狂するタイプの人物だった。アリストパネスをはじめ、当時の喜劇作家は、彼を笑いにしている(『雲』一四四行、『鳥』一二九六行)。民主派の仲間で、敗戦後に成立したクリチアアスの三十人独裁政權に抵抗して国外に逃亡し、アテナイに民主制が回復してから帰国した(Apol.21)。

②1 ポレマルコスⅡソクラテスの仲間。ソクラテスと同年か、それより一回り若かった。父のケパロスは、もとはシケリア島のシュラクサイの人であったが、ペリクレスの招きによりアテナイへ移住し、その外港町ペライエウスに三十年

間住んだ。父は市民権をもたない居留民（メトイコス）であったが、きわめて裕福であったので、ポレマルコスも恵まれた家庭環境のなかで育ち、アテナイの上流青年たちと交わったものと思われる。この交わりにソクラテスも深く関わった。『国家』の議論は、このころ（前四三〇年、もしくは前四二二／二年）ポレマルコスの家で行われたことになっている（Resp.328B）。『国家』冒頭の情景からも明らかのように、彼はソクラテスときわめて親しい間柄で、シモニデスの詩句をもとに、正義について議論の口火をきっている。父の死後、南イタリアのトゥリオイに移ったが、アテナイ軍のシケリア遠征の失敗により、同地にとどまることができず、前四一二年アテナイに戻り、再び居留民としてペイライエウスでくらしした。前四一二～四〇四年という時代設定で書かれた『パイドロス』に登場するポレマルコスは、「すでに哲学の方に心を向けている327B」とされている。だが依然として資産家であり、三つの家を所有し、一二〇人の人を雇って武器（盾）の製造業を営んでいたと伝えられている。LysiasXII 岩波プラトン全集十一『国家』巻末の解説（七九〇頁）参照。

②② ヒポタレスⅡ『リュシス』に登場する青年。ヒエロニュモスの子（Lysias.203）であるとされ、名家の子弟であることが察せられるが、詳細不詳。

②③ リュシスⅡ『リュシス』に登場する青年。アイクソネ区にすむ著名人デモクラテスの長男（Lysias.204E）であるから、典型的な名家の子弟ということになる。「容姿はひときわ目立ち、美しい少年といわれるだけではなく、〈美しくよき少年（貴公子）〉と言われるべき Lysias.207」人物であった。同書におけるリュシスは、ソクラテスにあいづちを打っただけでほとんど発言せず、どのような考えの持ち主であったのか分からないが、純粋な愛知の心の持ち主であること

が察せられる(Lysis.213)。

②④カイレクラテスⅡ『思い出』によるとカイレクラテスは、功名心のためにソクラテスの門下になったのではなく、「有徳の士となり、家に対し家族に対し、親戚友人に対し、国家に対し市民に対して、立派に本分を尽くさんがために」ソクラテスについたとされている(Mem. I.2.48)。カイレポンの弟(Mem. II.3.1)であるが、兄弟の仲はよくなかった。

②⑤エウテュデモスⅡ若いころにソクラテスの熱心な弟子となる(ソフィストのエウテュデモスⅡディオニュソドロスの弟とは別人)。昔の賢人たちの書物をたくさん集め、善美の人になろうと志した(Mem. IV.2.8)。ソクラテスの吟味を受けて意気消沈したが、彼のもとにいないとまともな人間にはなれないと考え「やむを得ぬ用事のあるときのほかは、決して彼のそばを離れないで、そのうえ彼の日常をいくらか模倣した。Mem. IV.2.40」

ソクラテスの教育が生み出したのは、以上に見たような少数の、しかも多種多様な愛知者たちであった。彼らに受け継がれた愛知の営みは、やがて途絶えてしまったが、プラトンに受け継がれたそれは、アリストテレスによって体系化され、千年以上の長きにわたって学問全体に大きな影響を与え続けたのである。